

令和2年度 自己評価書・学校関係者評価書

■ そう思う ■ どちらかといえば、そう思う ■ どちらかといえば、そう思わない ■ そう思わない ■ 無回答

①豊かな心をはぐくむ教育の推進

<h3>1 一人一人の児童生徒の尊重</h3>	<h3>2 友達への思いやり</h3>	<h3>3 道徳・心の教育の充実</h3>
<p>学校は、一人一人の子どもを大切にしたい指導や対応ができていますか。</p>	<p>子どもは、友だちとなかよくしていると思いますか。</p>	<p>学校は、豊かな人間性を育む心の教育の充実に努めていると思いますか。(礼儀、生命尊重、思いやりなど)</p>
<p>一人一人の児童の尊重の項目においては、「そう思う・どちらかといえばそう思う」の評価が、保護者と児童、教職員全てにおいて昨年同様高い割合をしめているが、特に児童の評価が昨年と比べ、伸びている。また、友達への思いやりや道徳・心の教育の充実の項目においては、「そう思う・どちらかといえばそう思う」の回答の割合が向上し、95%を超える結果となった。心がやけ月間で道徳の授業を公開したり、ローテーション道徳を実施したり、学校での様々な取組の啓発ができてきているのだと思われる。職員間では、毎週の生活朝会で児童理解の時間を設け、全職員で共通理解のもと指導にあたっている。今後も子どもたちが「学校は楽しい」と感じられるよう、保護者との協力体制をとりながら教育の充実に取り組んでいきたい。</p>		

②確かな学力を育む教育の推進

<h3>4 意欲的な学習態度</h3>	<h3>5 授業力向上</h3>	<h3>6 ICT活用</h3>
<p>子どもは、意欲的に授業に取り組んでいると思いますか。</p>	<p>先生方は、わかる授業、楽しい授業づくりに努めていると思いますか。</p>	<p>先生方は、ICT機器を活用してわかりやすい授業づくりに努めていると思いますか。</p>
<p>意欲的な学習態度の項目では、「そう思う・どちらかといえばそう思う」と回答した児童の割合が、昨年度よりも多くなっている。授業力向上の教職員の回答からも分かるように、「授業改善」に一人一人が取り組んだ結果、校内研修の主題である児童の「自ら考える力」が高まってきたと考えられる。引き続き、課題設定や学び合い活動などの取組を継続させながら、学力の向上を図りたい。「ICTの活用」については、教職員の評価において昨年と比較すると、若干下がっている。今後、一人一台ずつタブレットが導入された中で、教職員の不安も高まり、活用頻度にも差が生まれてくると考えられる。子どもたちの学力向上のためにも、来年度はICT活用を校内研修の中心に据え、より良い活用のあり方を考えていく必要があると考える。</p>		

③健やかな体を育む教育の推進

<h3>7 健康づくり</h3>
<p>子どもは、好き嫌いをなく食事をし適度な運動と十分な睡眠に気をつけて生活していると思いますか。</p>
<p>体力低下、メディア依存など休校の影響の実感からか、職員の「そう思わない」という割合が昨年を上回っている。「スポーツ教室」「食育タイム」「元氣アップ週間」などを継続して取り組み、児童がすすんで体力、健康づくりに取り組める活動を工夫していきたい。</p>

①いじめ不登校などに対する相談支援体制の充実

<h3>8 児童生徒理解</h3>
<p>先生方は、子どものよさを見つけ、子どもを理解しようと努めていると思いますか。</p>
<p>○児童理解、いじめや問題への対応について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合が全体的に高い。保護者の評価では、昨年度との大きな差は見られないが、どの項目もさらなる信頼を得るため、改善していく必要がある。また、児童の評価では、児童生徒理解といじめ問題への対応について、「そう思う」の割合が下っており、やや話づらさを感じていると考えられるので、話しやすい関係づくりに努めたい。今後、子どもたちとの信頼関係を深め、保護者や子どものニーズを把握し、丁寧に対応していくことで、いじめの未然防止や早期発見、支援を必要とする子どもの過ごしやすき環境づくりに努めたい。そして、子どもたち一人一人の笑顔を増やしていきたい。 ○支援体制については、教職員の「そう思う」の割合が若干下がっている。全職員が参加できる児童理解の場の設定と、支援委員会前後に、学年での情報共有の徹底が必要であるとされる。</p>

②特別支援教育の推進

<h3>9 いじめや問題への対応</h3>	<h3>10 学校の支援体制</h3>
<p>学校では、いじめや問題があったとき、すぐに話を聞いて対応していると思いますか。</p>	<p>学校は、支援を必要とする子どもの教育について、共通理解を図りながら取り組んでいると思いますか。</p>

①子どもたちの身近な安全対策の充実

<h3>11 安全と事故防止</h3>
<p>学校は、子どもの事故防止などの安全教育に取り組んでいると思いますか。</p>
<p>今年度は、「1月現在で避難訓練が一度しか実施できていないことから、「そう思う」の割合がやや下がっているように思う。職員の危機意識を高め、安全に関する学級指導を充実させる必要がある。また、感染症対策の観点での指導も、例年以上に危機意識をもって取り組んでいきたい。</p>

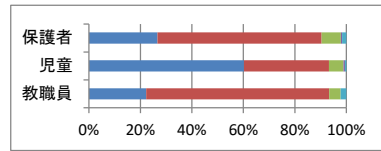
②最適な学習環境の整備

<h3>12 施設・設備の安全管理</h3>
<p>学校の施設・設備は、安全でよく整備・管理されていると思いますか。</p>
<p>施設・設備の安全点検については、施設・設備の老朽化に伴い、整備が必要などところもある。毎月の安全点検を丁寧に行うとともに、関係機関等と連携を取りながら対策を講じ、児童の安全管理に努めたい。</p>

③家庭・地域社会との連携強化

13 教育方針・目標の理解

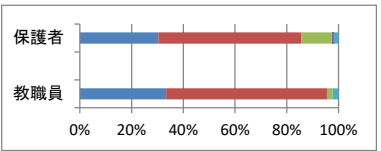
学校は、教育方針や教育目標などを、子どもや保護者地域にわかりやすく示していると思いますか。



定期的に発行する学校だよりや学年・学級通信で、本校の教育方針を示すことができた。また、コロナ禍の中で、地域人材を活用した取組は、昨年度と比べてずいぶん制限せざるを得なかったが、田植え・稲刈り、キャリア学習、町探検等、できる範囲で行うことができた。しかしながら、肯定的に捉えていない保護者も少数ながら存在することを謙虚に受け止め、コロナ禍の中でどう連携を推進していくか探っていくべきではない。

14 家庭や地域との連携協力

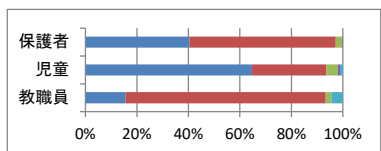
学校は、家庭や地域と連携・協力しながら教育活動を進めていると思いますか。



⑧本校の教育

15 いじめを許さず、自分と他の人を大切にできる児童を育てる

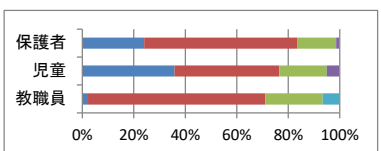
子どもは自分自身と他の人を大切にしていると思いますか。



○自尊心・自己肯定感については、子どもたち一人一人を認め、ほめ、励まし、伸ばすことを基本として自己肯定感を高める努力をしてきた結果、保護者は昨年と同じくらい高かったが、児童、教職員はやや低い評価であった。さらに子ども一人一人を認め、ほめ、励まし、伸ばす努力をしていきたい。
 ○話の聞き方・話し方に関しては、保護者・児童・教職員すべてにおいて、約20%の人が否定的な回答であることが分かった。幼保小中連携で取り組んでいる「話し方のあいうえお」「聞き方のかきけこ」を今一度確認し、聞き方・話し方の向上に努めていきたい。
 ○体力向上に関しては、コロナウイルス感染症防止対策の中ではあったがほぼ例年どおりの結果となった。今後、コロナウイルス感染の状況を見ながら全職員で体力向上に向けた取組を実施していきたい。

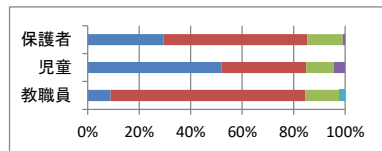
16 日々の授業を充実することで、自分の意見を出し合う子どもを育てる

子どもは話をよく聞き、自分の思いや考えを発表することができていると思いますか。



17 自己の体力を高める子どもを育てる

子どもは体力向上に努めていると思いますか。



来年度の具体的な取り組みについて

○児童の豊かな心を育成するために「道徳の授業」と体験活動を関連づけて取り組み、人権教育を推進していく。また、ローテーション道徳を継続して行い、教師の持ち味を生かす。さらに、「きずなアンケート」や「心のアンケート」も継続して実施し、児童の一人一人の実態把握と一人一人に応じた指導に努めていきたい。
 ○校内特別支援教育推進委員会、人権教育部会、生徒指導部会、健康教育部会を活性化し、学校教育の組織力をさらに向上させる。
 ○校内研修をさらに充実させることで教師の指導力向上を図っていく。特に一人一台タブレット端末の活用法に力を入れていく。また、熊本市学力検査の結果を活用し、学力の状況を把握・分析をすることで本校の大きな課題の一つである学力の向上を目指す。さらに、各教科を通じたためあての提示と振り返りの徹底、「話し方・聞き方」等の学習規範の徹底にも積極的に取り組んでいく。
 ○感染症対策や感染予防の徹底を図りながら、教科体育を中心に体育委員会の「スポーツ教室」や外遊びの奨励を継続・発展させて、体力の向上を図っていく。また、基本的な生活習慣を学力充実の基礎の一つとして捉え、毎学期の「元気アップ週間」の取組を充実させていく。
 ○校区の実態を踏まえた交通指導をはじめ、具体的な問いかけを重視した安全教育・防災教育に取り組み、危険予知能力、回避能力の育成に努める。
 ○個に応じた指導を推進するために、特別支援教育コーディネーターを中心に、子どもの実態と教育的ニーズを把握し校内支援体制の充実を図るとともに、家庭との連携を深める。また、スクールカウンセラーや心のサポート相談員等の専門機関との連携をさらに充実させる。
 ○感染症対策や感染予防の徹底を図りながら、幼保小中高の連携を推進するために、方法を模索しながら情報の共有化に努めることで連携を強化していく。特に、今年度実施できなかった県立熊本西高校との「ふれあい教室」は、方法を工夫して開催し、児童生徒の交流を図っていくようにする。
 ○地域に根ざした開かれた学校づくり推進のため、本校校区の特性を生かした学習支援や環境整備、学校安全支援のための連携を図る。また、学校ホームページや学校だよりを活用し、学校教育活動の公開に努め、学校への家庭や地域の理解を深める。

学校関係者評価

○コロナ禍で、様々なことが制限される中、子どもたちはのびのびと学校生活を送っているように思う。インフルエンザによる出席停止もなく、感染予防の意識が向上している。
 ○本年度の運動会はコロナ禍の影響を受け、簡素化して行われたが、よかったと思う。祖父母等、孫とのコミュニケーションのきっかけにしている家庭にとっては寂しい思いをされただろうが、子どもたちの成長を見るという点では、整然として素晴らしいと思ったと思う。
 ○一人一台タブレットが使えるようになり、ずいぶん便利になった。熊本市は電話回線を使っているが、安全面、コスト面で学校にWi-Fiを導入するのはどうだろうか。
 ○本年度より、部活動が社会体育となり、先生方子どもと向き合う時間が増える等、さまざまなメリットが出てよかったと思う。
 ○話す力をつけるため、学校では、校内研究を中心に、日常的な指導で取り組んでいるが、家庭での親子の会話も大切だと感じる。
 ○挨拶はよくなってきている。その反面、大人から声をかけない挨拶が返ってこないこともしばしば見られる。城山校区には、各地から転居してこられた家庭が多いことも原因としてあるのかもしれない。
 ○OPTAに加入していない家庭が数件あるということだが、その理由は、役員になりたくない、やらされている感が強いからではないだろうか。